

## 永遠回帰における「決断の時」の可能性

ハイデガーのニーチェ解釈を「存在史的思索」から読み解く

小林 昌平(早稲田大学 文学研究科)

本発表の目的は、30年代ハイデガーのニーチェ解釈に基づき、ハイデガー自身の同時代へむけた時代診断を分析することで、ハイデガーのニーチェに対する態度を明らかにすることである。よく知られているように、1936年から40年にかけて行われたニーチェに関する一連の講義(以下「ニーチェ講義」と呼ぶ)において、ハイデガーはニーチェを形而上学の「完成者」として性格づける。ニーチェにおいて「存在」は「仮象」として、「真理」は「誤謬」として性格づけられ、これをもってプラトニズムは顛倒される。力への意志によって高揚されつつ維持される「生」こそが現実的なものであり、そこにおいては様々な生における価値が遠近法的に分化しながら共存し、統一的な「真理」など立てられなくなるのである。形而上学を「プラトニズムの歴史」として捉えるハイデガーは、この顛倒、そして超感性的世界の廃棄に形而上学の「完成」を見るのである。

ただしこの「完成」をもって、形而上学の時代が未来永遠続くとハイデガーは考えているわけではない。講義「同じものの永遠回帰と力への意志」において述べられるように、それは「完成した無意味さの時代」の始まりなのである。この時代においては「存在」と「真理」はもはや——ニーチェが最後に行なったように——もはや問われることがなくなり、もはや人間の「生」だけが現実的なものとなる。同時に、この「生」のために有益なもの、すなわち「体験(Erleben)」されるもののみが存在者として認められるものとなるのである。そこで生のために製作され、搾取される存在者の在り方が「作為機構(Machenschaft)」である。

ニーチェが予告したこの「完成した無意味さ」の時代と、この時代それ自身との差異は、形而上学と、ハイデガー自身の「存在の歴史」をめぐる思想、「存在史的思索(das seynsgeschichtliche Denken)」によって分け隔てられる差異である。形而上学の完成は、それが完成した後の無意味さの時代において、形而上学自身の全体像とその成立根拠を把握可能になったからこそ、遡及的に論じることができる。形而上学を超えて、形而上学自身の根本体制を問題にするこの思考が、「存在史的思索」と呼ばれているのである。そしてこの時代こそ、ハイデガーの生きた20世紀である、と捉えられるのである。

ハイデガー自身による「完成した無意味さの時代」という同時代の規定と、「存在史的思索」にとって本質的なこの時代性の関係は、彼がこの思索を初めて開陳した著作である1936年から38年執筆の『哲学への寄与(エアアイグニスより)』においてよりはっきりと現れている。この著作においては、ハイデガーの過ごした戦間期が「存在忘却」の時代として性格づけられている。すなわち、人間が存在者を利用し尽くすことによって、存在についての問いをもはや問わなくなる時代である。この著作においても、ニーチェは最後に「存在」と「真理」について規定した者であった。ここにおいて「存在者とは何か(was ist das Seiende?)」という問いに導かれた形而上学の歴史は、「終わり(Ende)」を迎えるのである。しかし「ニーチェ講義」と異なるのは、それが形而上学の「完成(vollendung)」ではないこと、またこの語が、人間が存在についてもはや問うことすらなくなり、形而上学が自己解体してしまうという、「存在忘却」の時代のために用いられるということである。

ニーチェに基づいて、またニーチェを超えて西洋の歴史が到達した「存在忘却」という「完成」をその時代性に見出すことで、ハイデガーは同時代の状況に、両義的な可能性を見出す。第一に、存在忘却によって、もはやいかなる哲学も立ち上げられることはない、という見解である。ハイデガーにとって哲学は、「存在者とは何か」という存在の問いに導かれて展開されてきたのであり、これは形而上学の探求の試みに他ならなかった。それゆえ存在忘却の時代にはもはやいかなる哲学も可能ではなく、同時代の実証主義や、「世界観」の哲学、学校の教材としての哲学的教説をハイデガーは哲学のまがい物として糾弾することとなる。

しかし他方、ハイデガーはこの究極の存在の「困窮(Not)」の時代に、かつてない希望をも見出している。何故ならば、人間が全面的な「存在忘却」の状態にあることを見出すことそのこと自体が、形而上学そのものの体制に潜む存在の「拒絶(Verweigerung)」を明らかにし、そのことによって存在者を拒絶し、存在者の表象から「隠れる」存在、すなわち「存在(Seyn)」の概念を中心として、新たな思想を展開するよすがとなるからである。その思想が「存在史的思索」に他ならない。

以上の二つの可能性のうち、どちらを掴み取るのかという「決断(Entscheidung)」がこの時代に要請されている、とハイデガーは言う。もちろんこの二者択一によって、哲学及び現実の社会的状況が一変するわけではない。ハイデガーが1939年から40年にかけて書いた草稿群『存在の歴史(Geschichte des Seyns)』(ハイデガー全集69巻)においていうように、その時代において、決断に準備できていることと、決断をそもそもしないことの間こそ決断はあるのである。言い換えれば、ハイデガーにとって決断は、存在忘却の時代にあつて新たな「存在」概念による、形而上学を超克した思考の可能性を見出すことなのである。

そうした決断の瞬間を、ハイデガーはニーチェにも見出そうとしている。1937年夏学期に行われた「ニーチェ講義」のひとつ「同じなるものの永遠回帰」において、ハイデガーは永劫回帰説の中に見出せる「中間時」としての「大いなる真昼」を問題にする。ここから、形而上学の「完成」によって確立された無意味さの時代の永遠回帰の中での、人間の「決断」の契機がほのめかされているのである。ところが、その後のハイデガーの草稿の記述を紐解いて明らかになるのは、この「決断」の契機をハイデガーはニーチェに帰すことはせず、むしろ自身が見出すものとするのである。

本発表では、以上の議論を踏まえ、「存在史的思索」という30年代後半から40年代初頭までのハイデガーの独自の試みの理解を押さえた上で、この思索においてハイデガーの同時代に対する診断に、いかにニーチェの「形而上学」の分析が影響しているかを論じる。同時に、ニーチェに対してハイデガーがいかに距離をとっているかを明らかにすることによって、ハイデガーはニーチェにおいていかに新たな哲学を見出したか——またそれを放棄したのかを明らかにしてゆく。